回復期リハビリテーション病棟における多職種連携に関する看護研究の動向

小川　美枝[1)2)]・藤野　文代[3)]

Trends in Nursing Research on Interprofessional Collaboration in Convalescent Rehabilitation Wards

Mitsue Ogawa and Fumiyo Fujino

要旨

目的：回復期リハビリテーションを行っている患者に対し，多職種がどのように連携し患者を支援しているのか，どのような看護が提供されているのか，看護研究の動向から探求することで，今後の回復期リハビリテーション患者支援について検討する．

方法：医学中央雑誌Web版（Ver.5）を用いて「看護師or介護福祉士」and「多職種連携」and「リハビリテーション」and「高齢者」をキーワードとした．更に,「原著」and「看護論文」をかけて検索した．その結果，４件の文献が抽出された．該当文献数が少ないため，学会抄録集から10件加え，計14件を対象として分析した．

結果：回復期リハビリテーション病棟における多職種連携では，多職種間で共通のツールや，カンファレンスで情報を共有することで，統一したリハビリテーションや支援を提供していた．また，患者，家族がカンファレンスに参加し，希望や思いを目標や計画の中に反映させることが患者のADLの向上に繋がると報告があった．

多職種連携において看護師は，コミュニケーション能力の高さを活かし，多職種間での情報共有やカンファレンスの調整など，多職種間の橋渡し役を担っていた．また，患者・家族の思いを理解し，寄り添い，多職種に患者・家族の思いを伝えるなど，多職種と患者・家族間の橋渡し役も担っていると報告があった．

結論：14件の看護研究を分析した結果，事例研究が７件であった．回復期リハビリテーションでは，多職種間で共通のツールを使用した情報共有や，患者と家族の希望を目標，計画に反映させることが患者のADLの向上に繋がっていた．また，看護師が多職

１）　姫路大学大学院　看護学研究科　博士後期課程
２）　医療法人社団　三喜会　横浜新緑総合病院
３）　姫路大学大学院　看護学研究科

種と患者と家族間の橋渡し役を担うことで，患者を主体としたリハビリテーションや支援の提供が活発に行われる．どのように多職種が連携をすれば，よりよい支援に繋がるかを検証し，システムを構築していく必要性が示唆された．

キーワード：看護師，多職種連携，回復期リハビリテーション病棟，文献検討

Ⅰ．はじめに

回復期リハビリテーション病棟は，脳血管疾患又は大腿部頸部骨折等の患者に対して，ADL（Activities of Daily Living，以下ADL）の向上による寝たきりの防止と家庭復帰を目的としている．高齢社会の到来や，高齢者の生活の多様化に対応するための方策として2000年に回復期リハビリテーション病棟が創設された[1)]．包括ケア病棟の入院期間60日間に対し，回復期リハビリテーション病棟は，入院期間最大180日，リハビリテーション１日最大３時間と，リハビリテーションを集中的に行うための環境が提供されている． 2020年の診療報酬改定では，回復期リハビリテーション病棟のリハビリテーション実績指数の一部見直しや，入院患者にリハビリテーション実施計画書を用いての説明が求められている．また，管理栄養士の配置に係る要件の見直し，看護師にはリハビリテーションや多職種との連携が求められている[2)]．

筆者の勤務するA病院は，脳血管疾患や大腿部頸部骨折等の治療に力を入れているため，救急外来には同疾患の患者が複数搬送されてくる．その中には，A病院でリハビリテーションを行い自宅へ退院する患者も複数いる．それらの患者と救急外来で関わるなかで，患者がどのような経過をたどり退院，もしくは他施設へ転院していくのかなど，急性期から慢性期へ移行した後の看護に関心をもっていた．

医療従事者は可能な限り，患者の生活の多様化や選択肢の広がりに合わせ柔軟に対応することが求められる．患者がよりよい人生を送るためには，どのような支援が必要か考え，多職種で連携・協働して支援していくことが必要である．回復期リハビリテーションを行っている患者に対し，多職種がどのように連携し患者を支援しているのか，回復期リハビリテーション病棟における看護を明らかにしたいと考えた．そこで，回復期リハビリテーション患者に対する，多職種連携に関連した看護支援を看護研究の動向から探求することで，今後の回復期リハビリテーション患者支援について検討することを目的とした．

Ⅱ．方法

１．研究期間

2021年４月～６月

２．対象文献

2011年から2021年の10年間に報告された文献を医学中央雑誌Web版（Ver.5）を用いて検索した．検索したキーワードは，「看護師or介護福祉士」and「多職種連携」and「リハビリテーション」and「高齢者」とした．更に，「原著」and「看護論文」をかけて検索し抽出された101件の中から，多職種連携に関連していないもの，回復期リハビリテーション病棟におけるリハビリテーションに

関連していないもの，食事・嚥下に関するもの，研究者が看護師でないものを除外した４件を抽出した．該当文献数が少ないため，2019から2020年度の日本看護学会論文集より３件，2011年日本リハビリテーション看護学会学術大会の抄録集より５件，その他の学会集録集より２件を抽出した．抄録は３ページ以上のものを対象とし，計14件を対象文献とした．

３．用語の定義

１）回復期リハビリテーション病棟

本研究において厚生労働省の定義を参考に，血管疾患又は大腿部頸部骨折等の患者に対して，ADLの向上による寝たきりの防止と家庭復帰を目的とし，リハビリテーションを集中的に行うための病棟とした．

２）セラピスト

本研究において，理学療法士，作業療法士，言語聴覚士のことを総称してセラピストとした．

３）他職種

本研究において，看護師以外の職種のことを総称して他職種とした．

４）多職種連携

本研究において，医師，看護師，介護福祉士，セラピスト，ソーシャルワーカー，栄養士などの専門職が，連携・協働して患者を支援することとした．

Ⅲ．結果

回復期リハビリテーション患者に対する，多職種連携に関連した看護支援に関する看護研究14件を分析した．研究論文の種類は表１に示したように，原著論文が２件，実践・事例報告が２件，学会抄録10件であった．研究方法は表２に示したように，質的記述的研究が１件と少なく，介入研究が５件，比較研究が１件，事例研究が７件であり，事例研究が半数であった．表３に示したように研究対象者は，患者を対象としたものが８件と１番多く，次いで多職種を対象としたものが３件，患者と家族を対象としたものが２件であった．14件のうち，多くがリハビリテーションに関連した多職種連携によるカンファレンスや情報共有，患者のADLの向上に関する事例研究であった．患者と家族を対象としたものは２件で，患者と家族の思いに寄り添った支援を報告したものであった．表４に対象文献14件の概要を示した．

表１．論文の種類別文献数　(n=14)

研究種類	文献数
原著論文	２件
実践・事例報告	２件
学会抄録	10件

表２．研究方法別文献数　(n=14)

研究方法	文献数
質的記述的研究	１件
介入研究	５件
比較研究	１件
事例報告	７件

表３．研究対象者別文献数　(n=14)

研究対象者	文献数
患者	８件
患者と家族	２件
患者と看護師	１件
多職種	３件

１．多職種連携の現状

１）多職種連携によるリハビリテーション介入と看護師の役割

多職種連携によるリハビリテーション介入に関する研究は９件であった．文献３は多職種連携による筋緊張緩和を目的とした「リラクゼーションマッサージプログラム」を用いた介入報告であった．文献４は多職種連携による，多発褥瘡患者の身体機能向上と褥瘡治癒促進への介入報告であった．文献５は，患者の希望を取り入れた目標設定など，患者参加型看護介入の効果の報告であった．文献６は，セラピストと看護師の連携が患者のADLに与える影響についての報告であった．文献８は，看護師がリハビリテーションに参加した結果，患者や家族と向き合い現状と問題点を把握することができ，セラピストとの連携に繋げることができた報告であった．文献10は，チームアプローチのなかでの看護師の役割は，患者の思い，個別性を重視したリハビリの目標設定と，患者と家族に納得してもらうための説明，退院後の生活をアセスメントし，個別の在宅生活を支援するという報告であった．文献12は，セラピストと看護師が連携し介入したことで，ADLの向上や，患者と家族の「誕生日にアイスを食べたい」という希望を叶え，患者と家族の思いに寄り添うことができたという報告であった．文献13は，休日リハビリテーションを行う効果の報告であった．文献14は，月１回の定期ミーティング群と，２週間間隔でカンファレンスを行う担当者ミーティング群のADLの改善度を比較した報告であった．

２）多職種連携による排泄自立支援

多職種連携による排泄自立支援に関する研究は３件であった．排泄自立は在宅へ復帰する上で，介護する家族にとって重要なポイントになるため，ADLの向上とは別に，自立支援に取り組まれていた．文献１は，セラピストと看護師によるカンファレンスでトイレ関連動作評価表を用いて評価したものであった．具体的な援助法を計画，実践したことで，ほとんどの患者がトイレ排泄が可能になったという報告であった．文献２は，高次機能障害で失語症を有する患者で看護師が対応に困難感を抱いている症例に対し，CBA（Cognitive-related Behavioral Assessment，以下CBA）を共通ツールとして用いたカンファレンスを行った．カンファレンス後のインタビューからは，【諦めない姿勢】，【患者の希望に添える目標設定】の２つのカテゴリーが抽出されたという報告であった．文献７は，患者の「家に帰りたい」という思いを達成するため，排泄行動の自立を多職種連携で支援した報告であった．

２．回復期リハビリテーション病棟における家族支援

回復期リハビリテーション病棟における家族支援に関する研究は２件であった．文献９は，退院後の介護者である夫の強い希望により自宅退院へ向け，多職種で統一した指導を行ったことで，自宅退院に至った報告であった．文献11は，多職種と家族間でコミュニケーションノートを使用し，患者の情報や日々の変化，家族のニーズや思いを共有していた．リハビリテーションやケアに家族のニーズを取り入れた結果，自宅退院可能となった報告であった．

Ⅳ．考察

14件の看護研究について，１．多職種間での情報の共有，２．家族への支援の視点から考察する．

回復期リハビリテーション病棟における多職種連携に関する看護研究では，原著論文が２件と少なく，学会抄録が10件と半数以上を占めている．

表４．多職種連携における看護師の実践内容

	タイトル	著者	雑誌名，発行年	目的	対象者	概要
1	トイレ関連動作評価表を用いたリハビリとの連携－患者本来の排泄行動に近づくために出来ること－	高野 純菜，山内 真衣，川合 康夫，他１名	日本看護学会論文集：慢性期看護，170-173，2020	トイレ関連動作評価表の，排泄行動自立支援に対する効果を明らかにする	脳卒中患者で，リハビリテーションを行っている端座位が可能な患者19名	患者８名中７名に，FIMの向上が認められた．評価表の活用は多職種との協働が円滑となり，支援の統一，継続に有効であることが明らかになった．看護師は，具体的な支援方法を明確にし，チームの関わりをを統一した支援を提供した．
2	高次脳機能障害のある患者への看護師の意識変化CBAカンファレンスを用いた事例	荒牧 ゆかり	日本看護学会論文集：慢性期看護，206-209，2020	高次脳機能障害患者へのケアに対する意識の変化を，カンファレンスにおける発言の内容分析から検討する	カンファレンスに参加した看護師７名，リハビリスタッフ７名	同じツールで評価し，排尿介助が上手くいかない理由を多職種で話しあった．看護師はセラピストから何度もデモンストレーションを受け，統一した対応を提供した．その結果，【諦めない姿勢】で接することができ，【患者の希望に添える目標設定に繋がった】．
3	多職種連携による筋緊張緩和のための「リラクセーションマッサージプログラム」の実施と評価	竹久 千恵，武田 保江	Brain Nursing，35（9），83-88，2019	「リラクゼーションプログラム」を実施した結果を神経学的観点を含め考察し，看護上の示唆を得る	右前頭葉皮質下出血術後70歳代男性	看護師がリハビリテーション30分前にマッサージを施行．麻痺側の痙縮へのアプローチには筋肉の部位に合わせたストレッチとして，非麻痺側の過緊張にはリラクセーションで有効であった可能性が示唆された．今後はセラピストと情報共有し，日常生活に活かしていく必要性が示唆された．
4	回復期リハビリテーション病棟における多職種連携の一考察－多発褥瘡を有するケースへのアプローチを通して考える－	佐野 幸枝，後藤 まどか	日本看護学会論文集：慢性期看護，91-94，2019	多職種連携を実践しながら，３ヵ月の入院期間中に７ヶ所の褥瘡を治癒することができた事例の過程を分析した	理学療法士，作業療法士，介護福祉士，栄養士，各１名	各専門職が患者の問題点を明確化し，看護師がADL情報共有シートに記載をすることで情報を共有した．また，看護師は他職種が処置に立ち会えるよう時間に配慮していた．各専門職が他職種と関わりながら患者の問題点を明確化し，情報を共有することで，身体機能向上と褥瘡治癒促進を同時に進行できた．
5	リハビリスタッフと一緒に行う患者参加型看護がもたらした効果と課題	野瀬 貴可，鈴木 雄也，赤羽 公子	Brain Nursing，33（3），294-302，2017	患者参加型看護の効果を検証する	患者４名，看護師26名	看護師が患者の希望を取り入れた目標と看護計画を立案することで，患者はリハビリテーションに積極的に取り組むようになった．また，患者と看護師，セラピスト間で１週間毎に評価，次の患者目標を計画を立案することで，リハビリテーションへの動機づけや知識を患者に提供できた．
6	セラピストと看護師の連携による患者ADLへの影響と今後の課題～機能的自立度評価法（FIM）を利用して～	阿保 祥子，佐藤 文勇，山本 実衣，他１名	健生病院医報，37，48-52，2014	セラピストと看護師の連携が患者にどのような影響を与えているのか調査する	90歳代女性，70歳代女性	看護師とセラピストがそれぞれFIM評価を行い，患者が上手くできないことを看護師がセラピストに伝えるなど情報共有した．セラピストと看護師が連携することで，患者ADLを向上させることが明確になった．
7	多職種が共通目標を設定し，介入した一事例－排泄行動の自立に向けた介入チャートの導入－	白井 亜紀，後河内 淳，木曽 愛子，他１名	日本リハビリテーション看護学会学術大会集 録23回，60-62，2011	多職種間で共有するADLの詳細な評価のための介入チャートの効果，および，方向性を統一することでADL自立につながるかを明らかにする	脳血管疾患患者１名	セラピストと看護師が互いに把握している情報を共有，介入チャートを使用し現状の把握，問題点の抽出を行った．それをもとに看護師が，起居動作から排泄行動まで介入した結果，排泄行動の自立と在宅復帰に繋げることができた．
8	リハビリテーション参加を通しての取り組み－チーム間での情報を共有することの重要性－	前田 望，五十川 千春	日本リハビリテーション看護学会学術大会集 録23回，65-67，2011	リハビリテーション参加を行い，チーム間での情報共有ができ，個別的な看護が行える	看護師19名，セラピスト10名	リハビリに参加し，看護師は患者や家族と向き合い，ADLの現状と問題点を把握することができた．セラピストと目標や情報の共有し，看護ケアの統一に繋げることができた．
9	回復期リハビリテーション看護師に求められる退院支援の役割－老老介護世帯の在宅復帰への一事例を通して．－	高野 梓	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，160-162，2011	高齢者の退院・在宅支援における回復期リハビリテーション看護師の役割を検討・報告した	脳出血後77歳女性と夫	退院後に介助者となる夫の状況に合わせ，統一した指導を行うことで，自宅退院ができた．看護師は退院後地域への橋渡しとしての役割も必要であった
10	リハビリテーションチーム内で看護師が担う調整役－高次脳機能障害患者の一症例からの学び－	加嶋 律子	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，205-207，2011	復学に向けたチームアプローチのなかで看護師が担った役割について考察する	18歳女性	多職種連携での看護師の役割は，患者の思い・個別性を重視したリハビリ目標の設定や，それを患者や家族へ説明すること，退院後の生活をアセスメントし支援することであった．
11	チームアプローチで自宅退院を可能にした一例－家族がチームの一員に夏ために－	三宅 翔子，竹下 真由	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，222-225，2011	重症度の高い患者が自宅退院可能となった事例を通して，チームアプローチのあり方について考える	70歳代男性	看護師，セラピスト，栄養士と家族間でコミュニケーションノートを共有し，患者の情報や日々の変化，家族のニードや思いを共有した．家族の質問や不安に対し，その都度必要な説明や具体策を提示した．看護師は，家族の質問や不安に対し，必要な専門職に依頼をするなど橋渡し的な役割を担っていた．
12	リハビリテーションチームで協働し、患者・家族の思いに寄り添う看護	武田 留美，横田 未緒，木村 琴	香川県看護学会誌２巻，57-60，2011	各職種と連携をとり，回復期リハビリテーション病棟の看護師としての役割・支援のあり方について検討する	脳幹出血後50歳代女性	患者の思いや希望・不安について十分話し合い，患者が自らやる気をもって日常生活を送れるように援助することで，笑顔が増え，リハビリに取り組まれる姿が見られた．看護師は，患者の希望を叶えるため，多職種間や家族との話し合いや調整を行なっていた．
13	患者の満足が得られるリハビリの提供を目指して	斉藤 卓也，上坪 純子，熊谷 和美，他３名	北海道農村医学会雑誌43巻，62-64，2011	休日にリハビリ対する患者の満足が得られるようにする	リハビリテーションを行っている患者15名	休日のリハビリテーションを看護師が病棟で行ったことで，患者のリハビリテーションへの意欲が高まった．また，看護師がリハビリテーションの内容を把握することができ，PTと活発な意見交換をするという結果に繋がった．
14	回復期患者のADL拡大促進に向けた担当者ミーティングの有効性－「しているADL」の改善度を測定ツールとして－	阿部 広美，梅崎 百合恵，古幡 聡子，他１名	長野県看護研究学会論文集31回，143-145，2011	担当者ミーティングで，看護師とリハが情報の共有することで，患者のADLが改善されるかを調査する	定期カンファレンス群30名（内，６名は担当者ミーティング該当患者）	担当者ミーティングで情報を交換・共有し，各職種が具体的アプローチ内容を検討・評価した．看護師はその情報もとに病棟での介助を行ったことがADL拡大に繋がった．

また，質的研究が１件と少なく，事例報告が７件と半数を占めていることなどから，活発に看護研究が発表されているとはいいがたい．しかし，地域包括ケアシステム推進の一端を担う回復期リハビリテーション病棟は注目されている分野であり，施設数も増加している．今後は，多職種連携によるリハビリテーション支援の在り方や，患者と家族への支援についてなど，さまざまなテーマの看護研究が発表され，今以上に看護研究が増えていくのではないかと推察される．

１．多職間での情報の共有

多職種間での情報の共有は，同じツールや共通の介入チャートを用いて，カンファレンスで情報を共有するという文献が多かった．看護師とセラピストが共通のツールを使用することで，患者の自立度やリハビリテーションの状況が明確に把握でき，次の目標や指導がより具体的なものになると報告されていた．同じツールを使用し情報共有する利点として，①専門性の違う職種が患者を評価，共有することで，患者を様々な視点で捉えることができる．②看護師は病棟以外の場所での患者の状況を，他職種は病棟での患者の状況を知ることができる．③各職種が患者と家族へ提供した支援を，病棟でも統一して継続することが可能になる．④多職種間での情報の相違や重複が避けられるため，連携や統一が円滑になる．などが挙げられると考えられる．吉本らは，「在宅復帰率の高い老健では，全職種が利用者の状態について，定期的なカンファレンスや共通のアセスメントシステムを活用して情報を共有している[3)]」と述べている．各職種が得た情報を共有し，多角的な視点で検討，修正していくことで，看護師だけではなし得ない支援が提供できるのではないかと考えられる．また，病棟以外での患者の状況を知ることで，「リハビリテーションが思うように進まず落ち込んでいる」というような，患者の変化にもいち早く気付くことができ，必要な支援がタイムリーに提供できるのではないかと考えられる．そして，それらのひとつひとつが，リハビリテーションの推進や在宅復帰につながると考えられる．

本研究の対象文献では，看護師とセラピスト以外の職種との情報共有に関して報告しているのは，文献４の１件のみであった．多職種で連携し行った治療とリハビリテーション，および看護師の役割について報告していた．それぞれの職種が専門性を発揮しつつも，連携し，同じ方向に向かって協働をするには，各職種間の橋渡しをし，取りまとめていく存在が不可欠である．看護師の情報の整理と各職種への共有能力，および，人，物，時間をはじめとする様々な調整能力は，多職種連携のような環境において，チームの中心となり支援を推進する力になり得ると考えられる．遠藤らは，「看護師は，人間関係やコミュニケーションに関する能力を発揮することによって，チーム活動を円滑に進めていくことができる[4)]」と述べている．コミュニケーション能力の高さは看護師の特性である．その能力を活かして多職種間の橋渡しをすることが，多職種連携･協働を円滑にし，患者へ良い影響をもたらすのではないかと考えられる．

２．家族への支援

家族の希望に対し多職種が連携して支援を行った研究では，患者と退院後の介護者となる家族の希望を考慮した支援を行うことで，自宅退院につなげることができた報告であった．回復期リハビリテーション病棟では，限られた時間の中で，患者の状況に合わせたリハビリテーション支援や看護が求められる．しかし，患者と家族の生活は退院後も続いていく．だからこそ患者や家族の思い

やニードを尊重することが大切になる．看護師は患者の一番身近な医療者である．患者と家族の思いやニーズを理解し寄り添うことができるのも，患者の傍にいる看護師だからこそだと考えられる．平らは，「病棟看護師は，患者家族の思いを引き出しながら価値観を知り，どのような生活を望んでいるのか，両者の意思決定を促す重要な役割を担っている[5)]」と述べている．患者の傍にいる看護師だからこそもつことができる視点を大切にし，患者と家族の思いやニーズを他職種へ伝えていくことができる．

退院後の生活を見据え，患者と家族がリハビリテーションと回復期を乗り越え，在宅復帰できるよう，多職種や地域と連携し療養環境を整えていくことが，回復期リハビリテーション患者を支援する看護師にとって重要な役割であると考えられる．

今回対象とした看護研究では，それぞれの病院において独自の方法で試行錯誤しながら多職種連携を行っていた．その中の多くが看護師とセラピストによるリハビリテーションに関する情報共有や介入であり，看護師とセラピスト以外の職種との情報共有や連携に関しては文献が少なく検討できなかった．そのため，今後，先行研究のキーワードや検索範囲を拡大して検索し，研究を重ねていく必要がある．今回の研究の動向から，看護師の特性を活かしつつ，専門性の違う多職種がどのように連携し協働することが，より円滑で効率の良いチーム医療につながるかを模索すること．それらを，どのように活用，運営していけばより良い支援に繋がるのかを検証，研究を重ね，システムを構築していくことが，今後の課題と考えられる．

Ⅴ．結論

回復期リハビリテーション患者に対する，多職種連携に関連した看護支援に関する看護研究の動向を分析した結果から，以下の結論を得た．

1．対象とした看護研究14件のうち，事例研究が７件あった．
2．多職種連携によるADL向上や日常生活支援に関する報告が12件であった．
3．多職種連携による家族支援に関する報告が２件であった．
4．回復期リハビリテーションでは，多職種間で共通のツールを使用した情報共有や，患者と家族の希望を目標，計画に反映させることが患者のADLの向上に繋がっていた．
5．今回の研究の動向から，今後，どのように多職種が連携をすれば，よりよい支援に繋がるか研究を深め，システムを構築していく必要性が示唆された．

申告すべきCOI状態はない．

Ⅵ．文献

1）厚生労働省　令和２年診療報酬改定　個別事項：リハビリテーション
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000182077.pdf
2）前掲１）
3）吉本照子，酒井郁子，八島妙子他：老人保健施設の在宅支援機能と関連する因子および取り組みに関する文献検討．千葉看護学会会誌，17（１），61-68，2011.
4）遠藤圭子，岡崎美晴，神谷美紀子他：チーム医療を推進する看護師に必要とされる能力の検

討―多職種と連携する看護師への調査から―．甲南女子大学研究紀要，６，看護学・リハビリテーション学編，2012.

５）平望花，鈴木千絵子：地域包括ケア病棟における高齢入院患者の退院支援に関する文献検討．姫路大学大学院看護学研究科論究，４，99-107，2020.

対象文献

１）高野 純菜，山内 真衣，川合 康夫，他：トイレ関連動作評価表を用いたリハビリとの連携－患者本来の排泄行動に近づくために出来ること．日本看護学会論文集：慢性期看護，170-173，2020.

２）荒牧 ゆかり：高次脳機能障害のある患者への看護師の意識変化　CBAカンファレンスを用いた事例．日本看護学会論文集：慢性期看護，206-209，2020.

３）竹久 千恵，武田 保江：多職種連携による筋緊張緩和のための「リラクセーションマッサージプログラム」の実施と評価．Brain Nursing，35（９），83-88，2019.

４）佐野 幸枝，後藤 まどか：回復期リハビリテーション病棟における多職種連携の一考察－多発褥瘡を有するケースへのアプローチを通して考える．日本看護学会論文集：慢性期看護，91-94，2019.

５）野瀬貴可，鈴木雄也，赤羽公子：リハビリスタッフと一緒に行う患者参加型看護がもたらした効果と課題．Brain Nursing，33（３），294-302，2017.

６）阿保 祥子，佐藤 文勇，山本 実衣他：セラピストと看護師の連携による患者ADLへの影響と今後の課題～機能的自立度評価法（FIM）を利用して～．健生病院医報，37，48-52，2014.

７）白井 亜紀，後河内 淳，木曽 愛子他：多職種が共通目標を設定し，介入した一事例－排泄行動の自立に向けた介入チャートの導入．日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，60-62，2021.

８）前田 望，五十川 千春：リハビリテーション参加を通しての取り組み－チーム間での情報を共有することの重要性．日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，65-67，2011.

９）高野 梓：回復期リハビリテーション看護師に求められる退院支援の役割－老老介護世帯の在宅復帰への一事例を通して．日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，160-162，2011.

10）加嶋 律子：リハビリテーションチーム内で看護師が担う調整役－高次脳機能障害患者の一症例からの学び．日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，205-207，2011.

11）三宅翔子，竹下真由美：チームアプローチで自宅退院を可能にした一例－家族がチームの一員に夏ために－．日本リハビリテーション看護学会学術大会集録23回，222-225，2011.

12）武田 留美，横田 未緒，木村 琴：リハビリテーションチームで協働し，患者・家族の思いに寄り添う看護．香川県看護学会誌 ２巻，57-60，2011.

13）斉藤 卓也，上坪 純子，熊谷 和美他：患者の満足が得られるリハビリの提供を目指して．北海道農村医学会雑誌 43巻，62-64，2011.

14）阿部 広美，梅崎 百合恵，古幡 聡子他：回復期患者のADL拡大促進に向けた担当者ミーティングの有効性－「しているADL」の改善度を測定ツールとして．長野県看護研究学会論文集31回，143-145，2011.